

令和5年度組織目標 知事協議概要

部 局 名	琵琶湖環境部
日 時	令和5年(2023年)4月26日(水) 13:45~14:20
場 所	特別会議室
出 席 者	知事、江島副知事、大杉副知事、知事公室長、総合企画部長、総務部長、総務部管理監 部長、理事(琵琶湖政策・MLGs推進担当)、次長、管理監(クリーンセンター滋賀担当、最終処分場特別対策室長事務取扱)、技監(下水道担当)、環境政策課長、琵琶湖保全再生課長、循環社会推進課長、下水道課長、森林政策課長、びわ湖材流通推進課長、森林保全課長、自然環境保全課長

発言者	発言概要
大杉副知事	琵琶湖研究と行政が一体となって進めているのが滋賀の大きな特徴。新しい研究はもちろん、過去の研究成果をまとめておくことが国際会議の場などで滋賀の発信をする上で重要。国連はユース世代の意見交換を重視しているので、国際会議に高校生を連れていくなど検討してはどうか。
江島副知事	旧R1処分場やクリーンセンターなどは引き続き最後まで取り組んでほしい。 生物多様性や公園など新たな課題についても考えてほしい。 木は重要な課題であり、木育や木造などさらに前に進めてほしい。
琵琶湖保全再生課長	本年11月にハンガリー・バラトンフェレドで開催される第19回世界湖沼会議に合わせて、プレイベントとして高校生セッションを企画している。滋賀県の高中生とハンガリーの高校生の間で既に打ち合わせを始めたところ。本番まで5回の意見交換を重ねながら、何らかの形でユース宣言の提示、最終的にはバラトン宣言に少しでも反映できることを見据えて動いている。
江島副知事	琵琶湖環境部という琵琶湖、県内というイメージがあったが、国際的なつながりができており、世界にも目を向けていくことが大事。
琵琶湖保全再生課長	MLGs(マザーレイクゴールズ)のコンセプトはローカルでありながらもグローバルにも通じるもの。国や地域を超えた普遍性があり、国内外に強い発信力を持つツールであると認識しており、MLGs等の紹介を通じて世界の湖沼問題の解決に繋げていければと考えている。
理事(琵琶湖政策・MLGs推進担当)	そもそも県庁のDNAとして、1984年の世界湖沼環境会議がある。当時、国ではなく一地方自治体が国際会議を行うというのは画期的なことだった。以降、湖沼を通じて様々な国際貢献を行ってきている。
総務部長	やまの健康2.0にはいろいろな取組があるが、基本は林業の成長産業化。成長産業化に向けても企業との連携が何かできれば。 サーキュラーエコノミーは、廃棄物から資源をとりだすとか、再資源化にも取り組めれば。下水道も含めて広がっていけばよい。
総合企画部長	女性職員の育成について、中長期的な視点で女性職員が着実にキャリアをつめるようにしてほしい。
知事	業務の見直しについて、限られたマンパワー、時間をより有効に、部をあげて徹底してほしい。 視点視座の問題として、琵琶湖環境部でやっていることは数世代にわたるため、会議や計画作りなど、次の世代と一緒に取り組んでほしい。 広域の視点に立って、水系をみた中で琵琶湖の水源である山まで含めた視点でものを語り、事業を作ってほしい。 滋賀県でやっていることは世界の先端であるという自覚をもって、世界でどのような貢献ができるかを常に考えてほしい。MLGsは誇り。循環と静脈も琵琶湖環境部の特性であり、プラごみや産廃税、サーキュラーエコノミーなど、世の中に発信していけるように。 個別課題として、伊吹山と高時川のにごり対策は今年度しっかり方向性をだしていきたい。 やまの健康で木造や木育を進める際に、公的施設で何かできないか。県だけでなく、市町との連携でもよいので。
理事(琵琶湖政策・MLGs推進担当)	色々な課題があるが、それらは「持続可能な社会を作る」ということでつながっている。したがって個々の最適解を考えるだけでなく、全体最適を考えることが必要である。
知事	琵琶湖は私たちの暮らしを映す鏡であり、地球環境を見通す窓。琵琶湖環境部はそういう大切な湖を守っているのだという気概を持って。国や下流に琵琶湖のことを伝えていこう。